

3 人の一生 (通過儀礼を中心に)



< 出産 >

出産とか死亡とかいう出来事は、かりに長期滞在していたとしても、それに出合うのはまったくの偶然であるといわねばならない。また、滞在中に、たとえそのような出来事が起こったとしても、はたして部外者の「観察」が許されるかどうか、きわめて疑問であった。

というのは、我われはブリニョ部落で女兒を産んだばかりの母親に会ってきたばかりだった。妊娠中より、そのおなかの大きさと、すぐに産むであろうとは予想していたが、現場を見られず「残念だったなあ」と藤本隊員と話したものであった。この女性(15歳位か)の場合、妊娠中の写真はもちろん、出産後も、カメラを向けると驚いたように赤ん坊を抱いて逃げ出してしまうのであった。

出産は屋外で 出産については、ミッションからある程度のことは聞いていた。これには特別な産屋というものはなく、かならず部落の外の、ジャングルの適当な場所で行なわれる。この理由は血がきたないという理由と、男性に目撃されたくないということからであろう。また宗教的な意味があるかもしれない。このときは、ふつう、いく人かの女性が手伝うようであるが、ひとりですますこともあるという。そして以前は出産後、夫が現場へ迎えに来るのを待つという形態であったが、いまでは、出産後すぐに部落に戻ってくるのが一般化している。男が出産を手伝うということはなく、ふつう現場へも近ずかないようである。およそ出産に関して以上のような情報を得た。

そして、実際にシリアナ・ロベルト部落にて

出産現場に出合ったのである。

出産現場を目撃

の男児を出産

日 時	1972. 11. 5 10AM
場 所	シリアナ・ロベルト部落から 30mのジャングル内
出産者	ローザ(22歳)

そのまゝに産婦ローザの横顔を紹介しよう。

○ローザ(22歳) ロベルト部落の副首長・アントニオの第2夫人である。3歳の女兒の母親。この部落滞在中、我われはアントニオの横にハンモックをつり生活していた。当然のことながら、彼女は我われに対して食物をよく与えてくれた。また妊娠中も写真を撮られるのに嫌な顔ひとつしなかった。暗くなっても、いつもアントニオとベチャクチャとしゃべっていた。陽気な人だ。

女性たちがなにかガヤガヤ騒いでいるので、子どもが木から落ちたのかと思い、カメラを持って部落を飛び出した。フランシスカ(女性)が、私にジャングルに入れというので入っていると、そこに下半身血だらけのローザが寝ころがっていた。その横に、やけになま白いものがあり、それが生まれたての赤ん坊であった。

そのかたわらに血のかたまりがあり、新生児の姉(3歳)が立っていた。驚いて、とにかく藤本隊員を呼びに戻り、再びかけつけた。しばらくすると、ローザは起きあがり、胎盤をバナナの葉に包んで、それを「ポイッ」としげみに捨て、3歳の娘を背負い、えい児を抱いてジャン

グルを出た。

この間、彼女の姉ジュリアや他の何人かの女性も、だれひとりとして手伝いをする事なくすべて彼女一人の手によっておこなわれた。そして、ローザの顔にも、他の女性の顔にも我わ



れの顔にも喜びの笑みがいっぱいだった。そののち部落の外で赤ん坊の体に付着しているねばねばしたものを、サトウキビの皮でふきとり、水洗いをした。まだヘソの緒をダラリと下げた赤ん坊はあまり泣いていなかった。この間、部落の男性はだれもそばに来なかった。もっともこの時間は男子はわずかしきおらず、夫アントニオも、部落の10人ほどと約200km離れた他部落へ行っていたのであったが。

夜になって、ひとつのハンモックにローザと娘と赤ん坊の3人が寝たが、3人にはハンモックは小さすぎ、ローザのお尻がはみ出して地面につく。しかたなくお尻にマキをあてて眠ろうとするが、寝つかれないらしく、目はいつまでもあいていた。

産休もせず 翌日、ローザは2人の子どもを背中と胸につるし、ジャングルに入っていた。3歳の娘に生まれたばかりの赤ん坊を抱かせ、自分は木を切り倒し、すぐに皮をはいた。姉ジュリアとリンダが加わり、はいだ木の皮で

早速<ヤネマシャ>(子守帯)を作る。木の皮を輪にするだけのことである。もうこの日から日常生活に戻り、変ったことはみられない。もちろん、マキ割り、水吸み、農作物の収穫も行なうのである。彼女たちの強さには舌を巻く。



なお出産儀礼はとりたてておこなわれなかった。いままでも、行なう時とそうでない時があるそうだ。これは非常に簡単なことらしく、木の葉っぱで2〜3人の女性が、出産後の女性を叩くといったものらしいが、確認できずに終わった。

<なまえ>

ヤノマムは3歳位までの子どもにはなまえをつけない。これは、もし、なまえをつけると、力のない子どもたちは悪霊にさらわれると考えられているからである。そしてこのことは、また、なまえをつけられるということが、一人前の力あるヤノマムとして認められるということの意味するのである。

なまえしらない 我われが最も悩まされたのが、このなまえについてである。ヤノマムたちにはブラジル語の名前がついていたのである。彼らの固有の名をなぜそのまま使わないのか。

彼らに名を聞いても「タイミ(わからない)」と答えるのである。そこでFUNAIとミッションは彼らに名前をつけ始めたのである。いまではシリアナ族3部落、バキダリジュゼ部落、ボストのインディオのほぼ男子全員と、かなりの数の女子にブラジル名が付けられている。しか

し、当人が自分の「名前」を知っているかどうかは別問題である。我われは、資料的に詳しいミッションの作成した名簿を採用して、親族関係を記していったのであるが（FUNAIの記録はほとんどない）、「あなたは××か」といったら、そうでないのに「そうだそうだ」と答えることが何度もあった。彼らにとって、ブラジル語の名前などなんの意味ももたず、どうでもよく、すぐに忘れてしまうのである。とにかく名前と顔を一致させることがおおもとなる調査だけに、これは大問題であった。

なまえのタブー なぜ彼ら固有のなまえを使わないのか。これは他人に自分の名を教えると魂を抜かれると信じているからである。我われやミッションに教えないのはともかく、彼らのあいだではどうなっているのだろうか。まず家族のあいだでは「固有名」＜ターハ＞を呼ばない。またAさんの息子Bと話をするときAさんの父の「固有名」を出さないし、もちろんBの名も呼んではいけない。しかし他人の話をするとき、その「固有名」を呼ぶことはこの限りでない。

つぎに「固有名」をあげるが、これが10年間駐在しているミッションと我われが集めたすべてである。いかに教えるのを嫌うかよくわかる。

- | | | |
|---------------|-------|--------------|
| ①ブリニョ部落の1人 | kle | thama |
| ②ロベルト部落のアントニオ | māi | ta a |
| ③フィアーリョ部落の1人 | pyni | malixi |
| ④ワイカ部落のA | xoko | |
| ⑤ " B | mahuk | nanoxi |
| ⑥ " C | kopo | |
| ⑦ " | wālo | pata |
| ⑧リカルド(死亡) | ala | |
| ⑨アラキング | mahuk | sāi ihilupae |

⑩パッサリーノ(ブリニョ/オンサにかまれる前) hafe o m̃ys

⑪パッサリーノ(いま) tella pylima

⑫アルビノ(死亡) poxe a plaokwi a

⑬アラン mamō pouva

⑭ワウデマ(ポスト・バキダリ) hapo

⑮ジョワン(ポスト・バキダリ) hapo

⑯マテウス(ポスト・トゥカノ) kalia

これらの名前の意味は③は「ダニの一種」⑤は「足がかゆい」。⑥は「中肉中背の男」。⑦は「年をとった男」。⑨は「彼の小さな足」。⑭⑮は鼻または鼻の「穴」。彼らのなまえはこのように、我われからしてみると奇妙なものである。

＜初潮＞

この初潮の儀礼も偶然に出会わしたものである。我われの滞在期間中に、出産と初潮という人の一生のうちの大きな出来事を目撃できたということは、きわめて幸運であったというべきかもしれない。

この初潮をむかえた少女は、ロベルト部落のカーロスの娘ジャニィである。まずこのジャニィの横顔を紹介しよう。

○ジャニィ(12歳) 母親はすでに死亡して、おらず、同母の兄弟はいないようである。また目が悪く、他の娘たちがグラマラスなのにくらべて、わりあいやせ型である。無口な少女でいつも家の中にとじこまっている様子であった。

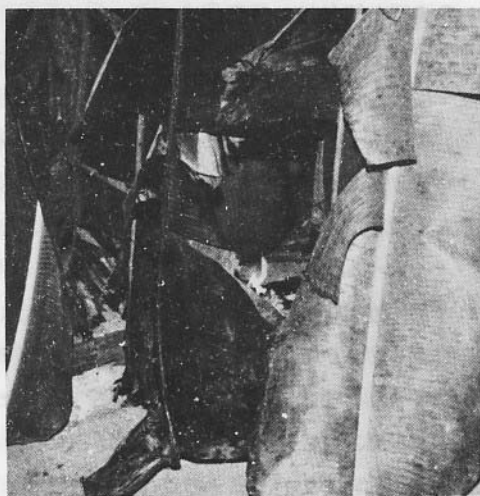
バナナの小屋に2週間 11月10日に始まったようである。11日に小さな部落家屋(ロベルト部落には家屋が2つある)の中に高さ1.8m、広さは3m×3mの大きさに、木で骨組みをつくり、バナナの葉で覆った簡単な

小屋を建てる。この小屋は女性たちだけによって建てられる。こうして組み立てられた小屋の中にひとりで約2週間入る。

この間、むろん外出は禁じられ、食事は「焼いた」バナナとビメンタ（唐辛子）「入り」の水が1人の付き添いの女性によって運ばれ、これら以外の食事は許されない。それはバナナのおかゆを飲むと歯が落ちると信じられ、水だけを飲むと体がはれたり、かゆくなると信じられているのである。（これはブリニョが教えてくれた。）このとき雨が降ったが、彼らの話では、

少女はおんなに この小屋には15日間入るのがふつうであるが、最近では「早く出たい」といえば、少々早くとも許されるようだ。この期間が終わると、そなえつけの水で体を洗い、そしてひとりで赤い染料（ウルクの実からとる）を顔から体中に塗る。（小屋に入居中は＜ブシマク＞＝腰まきもつけない。）こうして化粧がすむと母親または、それにかわる女性が連れて出るのである。

初潮小屋



ジャニィの場合（我われは最後まで見とどけなかったのだが）15日間の期日を守ったということであった。なおロベルト部落のハイムンダも数年前に初潮をむかえたが、このときはジャングル内に初潮小屋を作ったという。この儀礼を終えて女性は成人し、15歳位までにほとんど結婚してゆくのである。

＜結婚式＞

婚姻の儀式は信じられないくらい簡単なものである。新婦の父親が、新郎のハンモックの横にハンモックをつるすだけというものである。しかし父親がいない場合、それも省略するらしい。



新婚ホヤホヤのラウラとラウレンチノ

▷ラウラとラウレンチノの場合

（シリアナ族ロベルト部落）

5月に入域したときラウラは未婚の女性だったが、10月に入った時は結婚していた。そこで式が行なわれたのかを聞くと、ラウラには両親がいないので、このハンモックの式さえもなかったということのようである。ラウラはこれまでアントニオが父親がわりに育ててきたのであった。本当はアントニオが妻にしたかった、ということを開き、尋ねてみ

ると「ウン」とうなづいた。ラウレンチノはベネズエラのママビテリ族の出身である。彼らは現在、自分たちの畑を所有していないので、アントニオが面倒を見ている。

< 性 >

この問題を知ろうとするのは短期間滞在の我われにはきわめて困難で、おおかたミッションの知識にたよった。わかったことについてだけ書こう。

意識 性に関しての会話は、同性の間においても、また異性の間においても、あまり恥ずかしがらずに行ない、開放的である。ただ妊娠した女性に「赤ん坊ができたのか」と尋ねると非常に恥ずかしがる。彼らの性行為はまれに部落屋内で行なわれることもあるが、ふつうはジャングル＝屋外で行なわれる。また祭りのときなどは、近隣部落からインディオ数百人が集まり、性的に非常に開放的になることが多いという。

子殺し こうした意識は当然、若い世代にも共通であり、未婚の女性にも時々子どもができることがあるという。この場合、相手の男性は、ほとんど女性にその責任を一任してしまうので、出産後、育てるか殺すかは女性次第になることが多い。その女性が子どもが欲しければ育てるし、欲しくなければ殺すということである。このことは未婚女性に限らず、父親が子どもを欲しくないときや、母親が育てる自信のないときは、生まれ出た子どもを殺す。しかし最近では夫婦のあいだで、子どもを殺すことはほとんどなくなっているという。

婚外交渉 未婚青年男女の性的な問題が起きた場合、首長や周囲の大人たちはどのように処すか。これはたいてい、本人たちに「以後

注意しなさい」という説諭程度で終わっているようだ。

しかし既婚の男女間での話はもう少し複雑になるようだ。

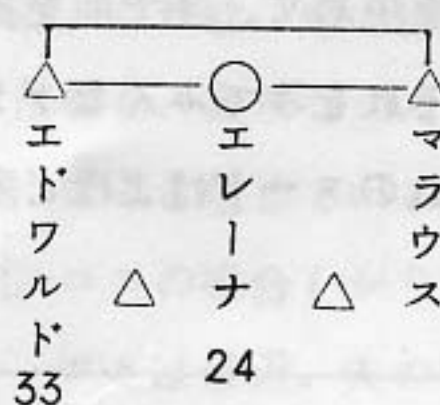
▷メリーの場合

(シリアナ族ロベルト部落)

メリーは過去に、

ロベルトに望まれて1度結婚をしたそうだが。しかしメリーはロベルトを嫌い、別れたという。その後カーロスと結婚。しかしある時、カーロスとけんかをしてブリニョ部落に行ってしまった。そこでフィリップとの間に子どもができた。そしてそのことをカーロスは非常に怒り、メリーに矢を放った。いまでもメリーのお尻にはその時の傷が大きなあとに残っている。なおこの事件のあと2人は元のさやに収まり、またカーロスとフィリップの仲も戻っているようである。というのは、彼らの間では、嫌いな者のそばには絶対にすわらないが、いまでは2人仲良くすわっているからである。

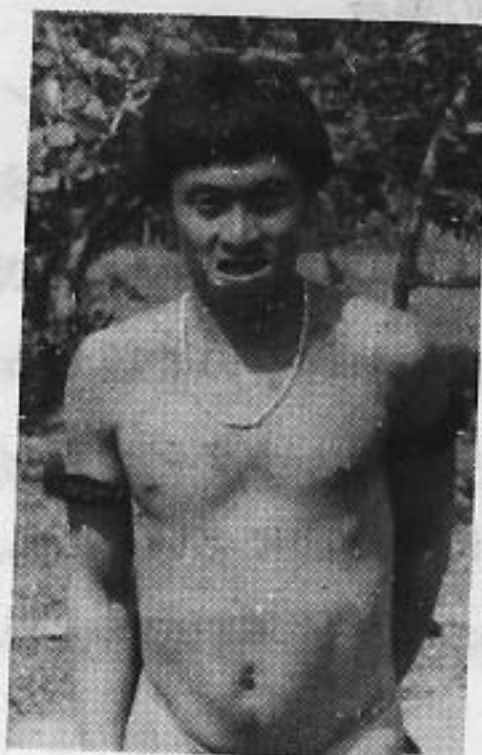
この種の問題が起こっても、時がたてば解決してしまうというのは、男は何人もの妻を持つことができ、女性にしてみれば売れ残る心配がなく、また親族の同一意識が強く、離婚後の生活の心配もないためかと考えられる。こうみてくるとなるほどと思えるのである。



また兄(弟)が弟(兄)に妻を貸したえたということもよく聞いた。

▷エドワルド(ロ

フィリップ



ベルト部落)と兄マラウス(マイココ地域)の場合

エドワルドの妻エレーナはマラウスの子どもを産んだ。この子どもは現在、エドワルドとエレーナのあいだで育てられている。

また同性愛の問題であるが、ミッションによるとホモ・セクシュアルは若い男性間に多く、特に親友間に多いとのことであった。女性同士については不明であった。

かゆに入れて飲むのである。このおり部落の成員はすべて激しく泣くが、儀式が終わるとケロリと泣き止むという。屍を焼いて飲むというのは、死者の生存中の勇気や力を自分の体の中に入れて、それを受け継ぐためである、と彼らは言った。

< 死 >

死者の出た場合の一般的な例をあげる。まず屍が焼かれる(この場合、どこで焼くかは不明)。その灰と骨を小さく砕いたものを、バナナのお

＝ ある 隊 員 の 水 浴 ＝

我われがヤノマムの部落に入った時、はじめ、荷物が届くまで着替えもなかった。毎日汗で汚れるし、例によって水浴していた。藤本隊員がのんびり裸で入っていると、女性たちが水汲みにやってきた。彼はあがるにあがれず、かといって女性たちは去ろうとしない。藤本隊員、覚悟を決めて、手で前を押さえてあがってくる。女性たちはそれをみてみんなゲラゲラ。裸の彼女たちにとって我われのヌードはよほど変で、おもしろかったのであろう。

Y・M